

《研究ノート》

Brattinga's Planning for industry, art & education 抄訳

西村 美香

本稿はオランダの印刷会社デ・ヨング社 (Steendukkerij de Jong & Co) に関する著作とそのデ・ヨング社が発行した『クワドラード・ブラッド (Kwadraat-Bladen)』(四角い冊子の意) 誌について、筆者が平成22年より翻訳および考察を進めている第6稿に当たる¹⁾。今回は“Brattinga's Planning for industry, art & education”(A. W. Bruna & Zoon, Utrecht, 1970) の32頁から45頁までを抜き出し翻訳したものを以下に掲げる。原著のこの部分では『クワドラード・ブラッド』全33冊中のうちの15冊をとりあげ、それぞれの号が発行当時にどのように批評されていたのかあるいは紹介されたのかがわかる『クワドラード・ブラッド』に寄せられた記事の冒頭部分が集められている。それは発行地のオランダにかぎらずベルギー、日本、ドイツ、イギリスなどさまざまな国で出版された雑誌に掲載されたものであった。

以下に挙げる翻訳文の第1行目は、各国の雑誌で掲載されたときの記事の題といくつかにはその記事を書いた人物の名前が記され(よって記名のないものの執筆者は不明である)それにより『クワドラード・ブラッド』のどの号に寄せた文かが知れる。『クワドラード・ブラッド』自体はもともと各号にタイトルがついてあるわけではなく、そのため当該号を編集したアーティスト、デザイナーの名前が記事の表題として書かれているものが多い。そして文末には記事が掲載された雑誌名と発行地、発行年月が記されている。そのあとに記されている人名は当該『クワドラード・ブラッド』の号の執筆者、編集者、タイポグラファー、写真家、画家などである。

以下より訳文である。

シャガール。神秘のための弁明

シャガールの作品「時計」のために、ピーター・ブラッティンガは南フランスにて石版用の石を用意し、彼に手っ取り早くその石でリソグラフをつくるよう説得した。この企画は成功だった。ベルナルド・マジヨリックの文章に加えてクワドラ・プリントにリソグラフの版画——それは実のところシャガールの作品としてはむしろ平凡なできであったが——が添えられた。マジヨリックの原稿は、何が近代的評論と呼ばれるべきか(評論家など死に絶えたと言い争うのは誰だ?)、簡潔で明確、深く探ら

れた規範とすべき見本であった。人は新たなコールリッジ [英国の詩人・評論家²⁾] に出くわしたとほとんど信じたかもしれない。

彼の評論は、ルネッサンスとルネッサンス以降の文化に対するもっともよく知られたもの、それに当時の「神秘的絵画の芸術性」のためのもっとも正統である弁明を含んでいた。それはわたしが今まで読んだいかなる言語のものよりも適切であった。われわれ近代の文化媒体に対する彼の評価がむしろ否定的だという事実は——そしてむしろ彼自身の主張が一貫性を欠くということは——彼の観察における重要性にはいかなる相違もうみださない。

『Vrij Nederland (平らなオランダ)』誌 (アムステルダム、オランダ、1957年1月) より

文：ベルナルド・マジョリック

リソグラフ：マルク・シャガール

タイポグラフィ：オットー・トルーマン

バックミンスター・フラワー

この出版物にはアメリカの有名な技術者 (バックミンスター・フラワー) の文章からの抜粋が含まれている。その中で彼は作業方法を文章 (オランダ語、フランス語それにドイツ語に訳されている) で説明するとともに、それをドームの写真やスケッチなどの美しいグラフィックデザインの職人技によっても表現している。

これはバックミンスター・フラワーの研究がもはや実験段階ではなく工業化 (大量生産による実用化) の範疇に入ったことを物語っている。実際、現存するアメリカのある会社は彼のドームのあるタイプを生産している。

『L' Architecture d' Aujourd' hui (今日の建築)』誌 (パリ、フランス、1958年) より

タイポグラフィ：オットー・トルーマン

編集者に寄せた投書：サンドベルグ2世

陰気な雨模様の1959年6月30日、オランダの人々はバナナの皮のにおいのする汚いモップを投げつける仕事にまた一度、取りかかった。理由はサンドベルグ氏だ。オランダ人以外でこのような感情の爆発を誰が起こすだろう。サンドベルグ氏は、もし皆がそう望むなら彼らが疑念をはさむことのできるような新しいポストスクリプトを考え出したのだ。

誰かがこの真実に気づいてそれを紙に書きとめるたびに、彼はすべての調査隊員が探しうる限りの支援とともに飛び上がったであろうし、そしてまたそれは暗黒時代に属するある種の暴言とテレビ視聴者の大きな叫び声をとまって、嚴重な保管の下に置かれたであろう。

彼の釘は引き抜かれるべきであろうか、あるいは引きずりだされ八つ裂きにされさらに新聞社の餌食となり火あぶりの刑に処せられるべきであろうか？ これは自らの

強い意志をもっていなければ起こりうることである。

アムステルダム、オプランドにて

『Het Parool(誓言)』誌(アムステルダム、オランダ、1959年7月4日土曜日)より
文、タイポグラフィ、デザイン：サンドベルグ

今日の機械、トン・デ・レーヴによる「音楽と技術」

「音楽と工学」でトン・デ・レーヴは、言葉と画像を使って太古の昔からの音楽と今日の電子的サウンドの興味ある比較を行っている。木材や金属の単純な使用から始まり、動物の皮を伸ばしてその上に弦を張ったもので敲いたり、かき鳴らしたりし、道具の範疇でフルートを開発し、ひよろ長いバルブにピアノ、まるで近代的複合機械のように複雑に入り組んだ構造…

『Haagse Post(ハーグ・ポスト)』誌(アムステルダム、オランダ、1960年4月2日)より

文：トン・デ・レーヴ

タイポグラフィックデザイン：ハリー・シェアマン

書き言葉

「書き言葉」はサイモン・ヴィンケンノーグにより集められた現代詩歌の名文集である。詩人と彼らの肉筆…肉筆は一見する限りでは地方の販売外交員それや英国上院議員、美人コンテストの女王の筆跡と違いがないように見える。

しかしこの手書き文字の背景には、これらの詩人達の筆跡には、その中にこそ詩が隠されている。詩それ自身の形態と内容により成り立つ近代詩そして1961年の世界の断面図が隠されている。このコレクションは未来に向けて拡張していくであろう、また詩や筆跡文学論の糧として活きたコレクションとして構築されていくであろう。『Radio-Televisie week(ラジオ・テレビ週刊)』誌(ブリュッセル、ベルギー、1961年3月4日)より

編集：サイモン・ヴィンケンノーグ

タイポグラフィ：トン・ラートランド

ブルーノ・ムナーリと彼の「読めない本」、植村鷹千代³⁾

ブルーノ・ムナーリのこの「読めない本」は、オリジナルというよりもショッキングな作品である。読者にとって読めない本はショッキングだし、絵のない画集は画家にとってもショッキングだろうし、レタリングや図案のまったくないこの出版物はデザイナーにとってもショッキングであるにちがいない。

この本にはどこを探しても文字は一字も印刷されていない。ただ上質の白い色紙と赤い色紙が綴じられているだけの本だが、各頁の紙に縦と横にさまざまな切り込みが

入っているの、頁をめくりながら、いろいろと組み合わせると、赤と白のさまざまな、モンドリアンの絵のような幾何学的な抽象絵画が生まれてくる。組み合わせはまったく自由で、しかも無数の変化があるので、とめどなく抽象絵画を制作する楽しみがある。字のある本を読んだり、絵のある画集をみているよりもおもしろく、退屈でない本の玩具になっているから不思議な本である…

『アイデア』誌（東京、日本、1963年発行）より

クリエイター：ブルーノ・ムナーリ

有機体

「有機体」の号は、クワドラ・プリントシリーズの総編集者であるピーター・ブラッティンガ教授 [彼は当時すでにオランダを離れ、ニューヨークのプラット・インスティテュートで教鞭を執っていた] 自身によって企画デザインされ、一方、文章は1924年ニューヨーク生まれのギリシャ系アメリカ人、デザイナーのウィリアム・カタボロスによって書かれた。このとても興味深い出版物は彼の化学的建築学についてのアイデアを取り扱っている。それは建造されるばかりではなく、化学的に生産される粉末や液体などの物質から有機的に成長するのであろう。化学的生産物はある活動的な因子とともに扱われたときに途方もなく膨張し凝固する大きな変化をもたらす。かくして海上の新たな都市は、油性の物質に合成樹脂の塊が注がれ大きな円状を形成する。新都市は円状や紐状のさまざまな形をした小片の網目状のつながりを形成し、それは隆起物や地殻に広がり、穴をあけ窪みをうがう。化学物質を含む二重の壁が窓にとってかわり、そして固定された床が生活のためのすべての必需品を提供する。二重構造によってふくらんだ合成樹脂の椅子は化学物質で満たされ、上向きにも下向きにも振動し冷たくも熱くもでき、音声やイオンフィールドを発する電子的デバイスさえ含んでいる。同じシステムによってつくられた可動式容器（コンテナ）は冷却も加熱もできレンジや流し、貯蔵庫の代わりにもなる。二重構造のコンテナの中では居住者は化学的なミストバスばかりでなく洗濯や乾燥もできる。洗面所として使用されているコンテナは必要に応じて上げ下げでき、また下水管が不必要とされるほどに、廃棄物を化学的に分解する。このような住居によって構成された都市では、近郊の町は朝になるとひとつの市に結合され、夕になるとそれぞれ別の場所に移動する。

これらはまるで馬鹿げた夢のように聞こえる。特に空想的な関連図面を見ると。しかし誰がそれが明日現実しないと切り切れよう。

『Möbel und Dekoration(家具と装飾)』誌（シュツットガルト、ドイツ、1962年10月発行）より

文：ウィリアム・カタボロス

タイポグラフィとデザイン：ピーター・ブラッティンガ

リートフェルト 1924年、シュローダー邸

リートフェルトの最もよく知られた作品は、まだ築40年を経っていないが、すでにクラシックと評される小ぶりな建築物である。この家は1924年にユトレヒトのプリンス・ヘンディリック通りにリートフェルトがT.シュローダー夫人のために建てた。他のいかなる建築物も「デ・スタイル」の概念を純粋に実現できなかったのに対して、この家は、反対なしで建てられたのではないが、現在では多くの建築の巡礼の旅のゴールとなっている。

非常に重要なことはこの建築物の広範囲に及ぶ記録が現在も利用可能なことだ。この号のクワドラ・プリントでは1924年当時のオリジナルの、3方向の外壁の図面とプラン、パースペクティブスケッチ、そして建物の新しいカラー写真を掲載している。加えてこの建築家リートフェルトの最近のコメントが彼の手書きで再生されて載せられてある。これらがそろったおかげでこのクワドラ・プリントの号は近代建築とデザインに興味のあるすべての人たちにとって貴重な資料となった。

簡潔で構成的なタイポグラフィの形式は、この号の主題とすばらしく調和している。デザイナーであり編集者であるブラッティンガは異種の要素：図面、カラー写真、手書きの文章とその翻訳（オリジナルのかたちを基本に構成された）をよく統制のとれた手法で、結びつけることに成功している。この号の主題であるデザイン（計画）と実行はこの出版物の価値の一つであり、敬意にあたいする。

『Intergrafia(インターグラフィア)』誌（アムステルダム、オランダ、1963年6月10日発行）より

建築図面（1924年）と文：リートフェルト

写真（1963年）とデザイン：ピーター・ブラッティンガ

書き言葉Ⅱ

このクワドラ・プリントのシリーズで第二版となる「書き言葉」（第一版は1961年であった）のためにサイモン・ヴィンケンノーグは近代詩集を選びすぐった。使用した紙の色のコントラストさえ目を見張ものがある。オリーブグリーンにブルーグリーン、ブルーとオレンジ、ブルーグレー、ピンク、ベージュそれに白と。19人の詩人達にはそれぞれ4頁が割り当てられ、そのうちのただひとつに詩人による手書きの詩が掲載されており、4頁目には名前や出身地、生年月日、本のタイトルなどが6～7ポイントの文字の大きさで印刷されていた。8人の詩人はオランダ語で、3人が英語で、4人はフランス語で、ひとりドイツ語で残り3人はロシア語で書いている。一つの例外を除いて、他の詩はみな、素人にでさえ、作者の性格を愛すべき手書きで表現することで洞察できるようになっている。

『Möbel und Dekoration(家具と装飾)』誌（シュツットガルト、ドイツ、1964年4月発行）より

編集：サイモン・ヴィンケンノーグ

構成の創世記

…ベルナルド・マジョリックによって書かれた「構成の創世記」は、1952年にメキシコで開催されたオランダ館の藁の壁にヤン・ボンスが描いた壁画を参照している。デザインの複製を添えた4つの言語で著された原稿で、著者は入手可能なスケッチからオリジナルの壁画の復元を試みている。芸術哲学と仮説は、彼がボンスの「台所」にすでにアクセスしていたことを示唆している。この簡潔な研究は興味深く書かれ、ボンスへの賞賛と評価を呼び起こした。ボンスはそれまでおそらく自分の仕事を明確に表したことがなかったからだ。

『Het Parool(誓言)』誌 (アムステルダム、オランダ、1961年12月23日発行) より

文：ベルナルド・マジョリック

タイポグラフィとデザイン：ヤン・ボンス

ノンゲーム (遊びではない)、ヨシュア・ライヒャルト

…この本はばらばらにされた60枚の頁から成り立つ。そしてそれぞれの頁はイギリスのデイリー・ミラー社新聞の小片の引き伸ばしである。デイター・ロスには彼自身これについて次のように述べている。「これらは1962年のデイリー・ミラー新聞の束から私が作ったいくつかの本の一部である。」…品質(驚くべき品質)を見せる代わりに、量(おびただしい量)を見せている。私はこのアイデア(質より量)を以下の要領で得た。「質」は商売(例えば広告)、それは量志向へのまさに巧みな道である。広告の質は(新聞頁数の)膨張ととどのつまり力は量だということだ。さあ、それでは1回分だけでそれだけの量を刷りましょう!

『Studio(スタジオ)』誌 (ロンドン、イギリス、1968年3月発行) より

クリエーター：デイター・ロス

ピムとフィロメーヌ

ピム・ファン・ボクセルは1966年3月、オランダの週刊誌『デ・ニュー・ライン』のために初めてドロイングを作成した。当時彼はブラッティンガに依頼されて「クワドラ・プリント」のシリーズのために4つの言語で著されたコマ割漫画を作っていた。それゆえ3頁に及ぶドロイングに表れる言葉は「オーレ、さあ、ああ、おお、そしてrrraaggg」だけである。「写真とドロイングだけでまったく文がなくしてコミュニケーションの効果は期待できるだろうか?」という問いに対してブラッティンガは「ピム・ファン・ボクセルに私が求めたのはドロイングでストーリーを伝えることだった。何が出てくるのか私はとても興味があった…。そして出てきたものはこの世で一番コミューニケイティブなものであった。すなわち、あのフィロメーヌ [カト

リックの聖人]の物語、大陸を結ぶ運命によって絵から絵となまめかしく導かれる彼女自身の物語：宇宙旅行者であったり、インドのマハラジャやイタリアのデカメロンが彼女のお気に入りや競ったり、これは何も彼女がまったくいやいやながらに聞き入れたものではない。

『De Nieuwe Linie(デ・ニュー・ライン)』誌(アムステルダム、オランダ、1967年3月11日発行)より

脚本とイラストレーション：ピム・ファン・ボクセル

デザイン：ピーター・ブラッティンガ

新しいアルファベット 欠損するアルファベット …それは

クロムウェルの企ては「ブラウン管を手段に、伝統的なタイプよりより構成システムに適した新しい書体群の提案」であった。

…そこにはあるべきものがなかった。書体は、細心の注意を払ってひとつずつ設計され、同じく組み立てにも細心の注意を必要とした。書体は直感によって設計されるが、人間の欠点として彼らはそれを魅力とも性格ともとれる独自の癖で構成してしまうことがしばしばある。つまりそれは組み立てには光学的矯正が欠かせないことを意味した。そのような作業はもちろん機械だけでも部分的にはできるが、しかしもっと部分的には非常に精巧なコンピュータが必要とされた。感性と結合した人間の目の精度は決して機械に取って代わられることはない…。それが何か正しくないものを感じるのだ。

『Intergrafia(インターグラフィア)』誌(アムステルダム、オランダ、1967年11月20日発行)より

文とデザイン：ヴィム・クロムウェル

ヘンリー・ミラー

この最新号は実験的というよりも不思議に興味の引かれるものほどなく呼ばれるであろう異例のものである。3色の水彩絵の具でクワドラ・プリントのために、奔放な性描写で文学界の長老ヘンリー・ミラーが特に仕上げたものであった。彼はこのとき数週間前に若く美しい日本人の歌手ホキ徳田と結婚したばかりであった。それが彼を刺激し、水彩をホキ・ドキ [Okey dokey とホキ徳田のホキを掛け合わせた造語か?]のように爆発させ、幸せな日々がここに再び現れ、世界中が恋人を愛していた。たとえ別のページに徐々にある種の疑いが垣間見られ、つぎのような叫びがあったとしても。彼女は私を愛していない！ なぜ！？ あのときのように幸せな日々！ 人生はそれほど過酷ではない。ちくしょうなんてこった！ 彼女のヌードは彼の力、画家としての力にある疑いを起こすかもしれない。しかし最後の頁で再び子供はこう話す——かわいい女性、小さな小屋、小さな木、かわいい動物——子供、この無敵の間は、彼が死に至るまで愛に包まれることを望み、それはいつだって可能だと思って

いた。ホキードキ！

『Algemeen Handelsblad(大衆取引誌)』(アムステルダム、オランダ、1967年11月30日発行)より

イラストレーション：ヘンリー・ミラー

表紙デザイン：ピーター・ブラッティング

今2、ランベルト・テゲンボッシュ

1959年夏、アムステルダム市立美術館館長であったW. サンドベルフによって書かれたどちらかという退屈な論考が、大きな騒動の始まりであった。ヒルフェルサムのデ・ヨング印刷所の広報誌クワドラ・プリントに掲載された「今」と題された論考は、人目を引くタイポグラフィカルなデザインを別にすると何もこれといって印象的な提案ではなかった。

文章の内容そのものは取るに足らないものであったけれども、それが他の誰でもなくアムステルダム市立美術館館長によって書かれたという単純な状況が騒動を自然とまきおこしたのだ。あれから9年が過ぎた。サンドベルフはアムステルダムからエルサレムに移り住んだが、未だデ・ヨング印刷所とは関係があり「今2」の出版で今日の社会福祉制度の問題について熱心に論じている。

彼の言葉は今回はそんなには大騒動を起こしそうではない。それらは新しい展望や洞察を示していないしほとんど誰も刺激することはない。今回はサンドベルフのここ10年間の影響からの関心をひきだすことであった。

『De Volkskrant(大衆新聞)』誌(アムステルダム、オランダ、1968年10月23日発行)より

文とデザイン：ウィリアム・サンドベルフ

注

- 1) 本稿以前の翻訳(および資料)は以下の5点である。「The activities of Brattinga 抄訳」明星大学造形学部研究紀要18号 pp.34-35、平成22年3月発行 「The activities of Brattinga(2) 抄訳」明星大学造形学部研究紀要19号 pp.28-29、平成23年3月発行 「『クワドラード・ブラッド』—1950年代～1970年代オランダ、エディトリアル・デザインの実験と実践」明星大学造形学部研究紀要20号 pp.28-34、平成24年3月発行 「ジュヌヴィエヴ・ワルトマン「出版物：クワドラード・ブラッド」翻訳」出版研究42 pp.211-221、平成24年3月発行 「ブラッティングによる産業のためのプランニング、技術、教育(抄訳)」明星大学造形学部研究紀要21号 pp.19-20、平成25年3月発行 なお、本稿の前半部分は、平成25年3月に発行された明星大学造形学部研究紀要「ブラッティングによる産業のためのプランニング、技術、教育」に重なる。その部分の翻訳をブラッシュアップさせて本稿に再掲している。
- 2) []内は訳者追記。以下同様
- 3) 東京の誠文堂新光社出版の『アイデア』誌に掲載されたこの文は、筆者の翻訳ではなく、1964年4月発行の64号 p.53より植村鷹千代の原文をここに載せる。